

審査結果の要旨

論文提出者氏名 山口裕之

山口裕之氏の論文は、これまでさまざまな解釈がなされてきた、きわめて難解なヴァルター・ベンヤミンの思想に関して、その3つの著作、すなわち『カール・クラウス』、『ボードレールにおける第2帝政期のパリ』および『ドイツ悲劇の根源』を中心に構造的な分析を行うことによって、その思想全体の基本的な枠組みを明らかにし、また同時にそこにおいて一貫して用いられている独特の手法の特徴を取り出すことを目的としている。したがって、本論文はベンヤミンの思想の新たな解釈を提示するものではなく、言ってみれば、それぞれの解釈者が解釈の際に考慮すべき基本的な前提に関して考察を加えたものである。

そもそもベンヤミンの思想は、ヨーロッパ近代の位置づけや批判に関する問題、あるいは現代における最もホットなテーマの一つである言語論などに関して、大きな手がかりを与えてくれる内容を含むきわめて重要なものである。しかし従来のベンヤミン研究においては、そうした点に関する意味は十分認識されながらも－そしてそれゆえにこそ多くの研究者や思想家がベンヤミンにさまざまな形で言及してきたにもかかわらず－、そこには本論文が解明を目指しているベンヤミンの思想の基本的な枠組みや、その独特な手法に対する反省が欠如していたため、一方で表現そのものの難解さや思想内容の外見的な不整合、例えば前期における神学的な傾向と後期における唯物論的な傾向の間に存在する差異の大きさなどに惑わされ、また他方で、それぞれの解釈者の立場やアプローチの違いに起因する、時には全く相反する解釈がなされてきた。本論文はこうした状況に一石を投ずるものであり、その意図の持つオリジナリティーと意義は十分に評価できるものである。

本論文はベンヤミンの思想の構造の最大の特徴を、〈3段階的な展開の枠組み〉ないしは独特の〈弁証法〉によって構成されているものとして捉えている。本論文は上述のベンヤミンの著作の分析を、比較的後期に属するカール・クラウス論から始めているが、それは著者が、クラウス論においてこの枠組みが最も典型的な形で現れていると考えたからである。本論文はそれをふまえて、それ以後の著作（ボードレール論）とそれ以前の、つまり最初期に属する著作（ドイツ悲劇論）の構造を分析するという形を取っているが、この試みは十分に成功しており、また大いに説得力のある結論が導き出されていると考えられる。

さらに本論文は、ベンヤミンのこの独特の〈弁証法〉を〈二義性〉、〈破壊〉、〈引用〉、

〈根源〉ないしは〈根源的なもの〉、〈ディゾルヴ〉、〈アレゴリー〉といった、思想の構造に関わるベンヤミン自身のさまざまな〈概念〉を駆使しつつ浮き彫りにしているが、その中でも著者は〈アレゴリー〉の概念を、それ以外の概念をいわば統括するものであり、したがってベンヤミンの思想の構造を最も端的に性格づけているものとして位置づけている。ベンヤミンによれば、アレゴリーは現実の歴史的世界の中に存在しているさまざまな形象の中にいわばモザイク的に現れているもの、別の言い方をすれば、星座のように〈配置〉されているものであり、しかもその現れ方ないし〈配置〉は、それがアレゴリーとしての現れであり、配置である以上、個々の形象そのものの現実的な関係を反映しているのではなく、全く別の連関（根源的なもの）を指し示している。もちろんこうしたアレゴリーの配置と、それが指し示すものは、ベンヤミンが取り扱っているヨーロッパ近代の個々のエポック（ドイツ悲劇論における18世紀のドイツやボードレー論における第2帝政期のパリ）、あるいはテーマ（高度資本主義社会など）ごとにそれぞれ異なっているが、それらを取り扱う際のベンヤミンの手法は構造的にほぼ一貫しているというのが著者の主張である。しかもこの主張は、上記の〈3段階的な展開の枠組み〉の場合と同様に、十分な形で論証されているものと考えられる。

なお著者は、ベンヤミンのこうした思考様式、見方は、著者が〈体系的・線状的思考〉と名づけるもの、あるいは概念による対象の記述や把握といった19世紀的な考え方の解体に結びつくものであるとしているが、こうしたいわば脱構築的な思想のありようは必ずしもベンヤミン独自のものではなく、少なくとも同時代的な比較例はいくつも存在する。この点への配慮が欠けていることは少々残念なことであり、逆にそうした同時代的な展望を行うことによって、例えば〈アレゴリー〉の概念によって統括されるとされている〈二義性〉や〈破壊〉、あるいは〈引用〉、〈ディゾルヴ〉といった概念に関する本論文の考察に一層の厚みが加わったものと考えられる。

しかし一方で、著者がベンヤミンに関する内外の先行研究を十分参照した上で論述を展開しているのはもちろんのこと、ベンヤミン自身がその思想を形成する上で重要な手がかりとしたアドルノ、ヘーゲル、ライプニッツ、あるいは本論文において取り上げられている2つの著作の対象であるカール・クラウスやボードレーについても、その著作ないしは作品をきわめて正確かつ緻密に読み解いており、その力量が本論文において十分な形で示されていることは否定できない。

以上のことをふまえ、審査委員会は一致して、本論文がベンヤミン研究の歴史に少なからぬ貢献をなすものであり、また地域文化研究としての思想史研究に新しい方向性を指し示すものであることを認め、博士（学術）の学位を授与するに十分なものであると認定した。